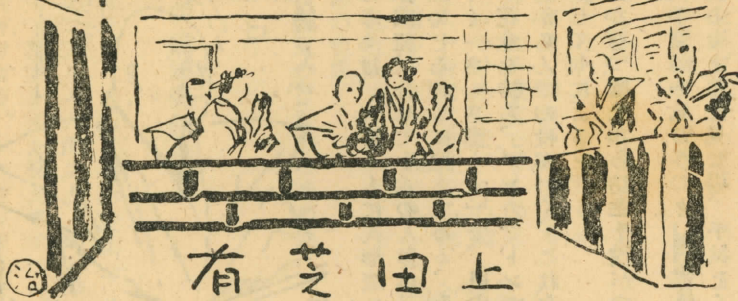


# 川柳文集楽見物



## 壇浦兜軍記

當る子の年初春興行の文樂を、川柳で見物しろといふ編集子の註文は、身にとつて阿古屋の琴責めにも似た難題、すなはち、紋十郎の阿古屋のように、ほつと肩で息して、両眼閉ぢたり、または手摺りと句箋を七三に、苦吟したり、このところ作者出遣ひにて御覽に入れましよう。

まづ阿古屋の琴責め、指先をなめて琴爪をはめたり、鶴沢寛弘の弾く琴に、きつちり合わせた指先の動きに、細かい藝を見せる、紋十郎得意の働らきで満場の拍手を浴びてゐる。その阿古屋の指先き、自由に動くためには、節足動物のよきな、深い溝がくられてゐる。

あかぎれのような阿古屋の指のしわ

琴弾け、三味線弾け、胡弓すれと、三曲責めは、この場の見せどころだが、相當に長帳場、ワキ役シテ役の重忠(吉田王助)岩永(吉田王徳)は、その間ぢう態度も崩さず、ぢつと後ろに控えてゐなければならぬ。責められてゐる阿古屋よりも、つらい役どころであらう。

## 白い顔赤い顔共に退屈してゐる顔

しかし、まだしも重忠には、セリフもあり、それにつれた任草もあるが、岩永と來ては全くの閑職、そこで、胡弓になつてから、火鉢と火箸を使つての、おどけた任草がつけられてゐるが、これは焦点を二分し、せつかくのクライマックスを散漫にさせるばかりで、勞して効なし(おつと、劇評子の領分へ越境して失礼)だが、あのハツキリした表情は、人形劇の持ち味の一つだらう。

## 眉に音立てて岩永怒り出し

### 京鹿子娘道成寺

若手太夫の出語りで、目のさめるような花やかな舞台、白拍子花子は紋十郎の出遣ひ、それに四人の所化僧、いはゆる「聞いたか坊主」、これは端役だが、主役の白拍子とからんでの所作があるから、いつもの一人遣ひの爪人形ではなく、頭と、左手と、足遣いと三人の人形遣ひがついてゐる贅沢さ。

所化僧も三人の供連れてゐる

しかし端役は端調にちがひないから、



治

かけて、くわへたように見せたり、肩へ掛けてやつたり、はずしてやつたり、まるで小学校の子供を学ばへやるときのように、手数のかかることおびたらしい。

戀の手習いさせるに紋十郎骨が折れ

### 伽羅先代萩

こんどは「竹の間」と「御殿」が出てゐて、御殿は櫓下豊竹山城少掾相勤めますとあつて、お目當てのところ、例のとほり、大夫はていねいに一礼し、唇をなめたり、下腹を撫でたり、居住ひを正したり、語り出すまでに、入念な仕切りがある、お客の方も身を入れて、その拳動の一つ一つに固唾を呑んで注目するから、場内は自ら靜肅になる。

語り出しから少掾は座をしめる

文樂座の番附の「幕間説物」といふところに、山城少掾の談として、自分は子役が不得手だから先代萩は苦手だった

が、ひいきの忠言に發奮して工夫研究を凝らして、語りこなす自信が出来、文樂座が松竹の經營に移つた明治四十二年に故攝津大掾が御殿を語り、同師は「つばめ」から古靱を襲名して「竹の間」を語つたといふ、思ひ出深い曲だと出てゐた。

欠食を歌うは日本一の聲

飯たき場の政岡は文五郎が違ふことになつてゐたが、老人年末に地下鐵の混雜で押し倒され、腰を打つて惜しくも休場、桐竹龜松が代役を勤めて、なかなか、りつばにこなしてはゐたが、なんと言つても、ふくささばきで、台子から茶道具をとり出したり、お炭点前まである長帳場だ、それに演出時間が、ちようど夕飯時間だから、ひとり鶴喜代君だけではない。

空腹の客にも長いままたき場

それに（また劇評氏の領分に立ち入つて恐縮だが）うしろ向きの姿になると、形がさびしく色氣がなくなるのはどうしたものだらう。だから、政岡が千松の死

はじめのうちは、人形一人に人形遣ひ三人の組が四組、合せて十六の人影が、狭い舞台にめじろ押しに控えてゐる、そしてようやく「さんさ櫻……」で、肌ぬぎになり、花傘を持ち、テンテツトンで、白拍子とからんでの役がつく、これを花合せめかして句によると。

あやめかきつばたから坊主も役がつき

〃恋の手習つい見習うて〃調がはりで、しんみりとした見せ場、手拭をくわへたり濃艶な振り事があるが、そこは人形だから、唇に仕掛けた釘に手拭をひつ



骸にとりついて三千世界に子を持つたの口説きの聞かせどころ、見せどころも、惜しくも生彩が薄らいた。

子を持つた親のこころのうしろ向き

吉田文五郎、當年とつて八十歳「鏝鏢」といふ、むずかしい漢字の形容は、制限されずとも文五郎師には不適當で、もつとトボケたおやぢさんだ。この初春興行も八十翁祝賀興行で「色模様文五郎好」なる一幕を出してゐる、見ないでも眼の先にちらつくあの色氣。

八十の親父のどこからあの色氣

### 伊達娘戀緋鹿子

お芝居でも、火の見櫓の段はギツクリ、シャツクリと人形ぶり、踊りのおさらへでも、黒衣を着た後見までつけて、これまたギツクリ、シャツクリとやつて見せる、その本家本元の人形淨るりだか

ら、大いにギツクリ、シャツクリだらうと思ひのほか、吉田光造の遣つたお七が、却つて人間らしいのはおもしろかつた。

文樂の方は人間ぶりで見せ



火の見櫓の前に立つたお七、スポットライトを浴びて、降りしきる雪の中に立つ姿の美しさ、胡粉に磨きをかけて艶出した頬の光りも妖しく。

泣きぬれたように胡粉の頬の色

(繪・中村治之)

### 文樂の「若手向上會」復活

長らく休んでゐた文樂の「若手向上會」が去る二月二十二日一日だけ第五回として開催された、語り物は本興行と同様で、役場次ぎのとはり。

第一部「節分」(松島、織の、富ら掛合、絃は廣助、吉三郎、友衛門、新三郎ら、人形は和夫、紋二郎、紋三郎)「日向島」(浜、絃は勝太郎、人形は景勝が紋昇、糸滝が紋之助)「野崎村」(雛、絃は錦糸、人形はお光が紋司、お染が紋之助、母親が文五郎、久作が玉男、久松が光次)「十種香」(越名、七五三、伊達の掛合、米は新三郎、清二郎、松之輔ら、人形は勝頼が龜三、濡衣が紋三郎、八重垣姫が紋司、狐火は源太夫)

第二部「衆仙人」(隅若、宮、住、綱の掛合、絃は八造、吉五郎ら、人形は衆仙人が玉男、増桐が紋司)「布引三段目」(口が大隅、清八、奥がつばめ、市次郎、人形は実盛が玉男、小まんが文五郎、瀬尾が龜三、九郎助が紋昇、妻御前が紋三郎、仁惣太が玉助)「堀川猿まはし」(松太夫、絃は綱造、人形は興次郎が紋昇、お俊が紋之助、母親が玉徳、傳兵衛が和夫)